

鳥



三 潤 野 庄

杜 談 講

鳥とり

◎ 庄野潤三
一九六四

昭和三十九年五月二十日 第一刷発行

著者 庄野潤三

発行者 野間省一

印刷所 東洋印刷株式会社

製本所 有限会社文信社

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽町三ノ一九

振替 東京三九三〇

電話 東京(942)一一一一(大代表)

定価 三八〇円

著者との了解により検印廃止

目次						
鳥	7					
薪小屋	99					
日ざかり	123					
雷鳴	143					
あとがき	225					

表紙・扉のカットはA・Gガーデナー「ウィンドフォールス」より

鳥

作 庄
品 野
集 潤 三

鳥

朝、起きるとすぐに家を飛び出して、

「マムシの道に向つて出発！」

といふ号令とともに、彼と二人の男の子——小学五年生の明夫と一年生の良二が、崖に沿つた小道を駆足で通り抜けて、向うの端にある芝生で体操をやつて帰つて来るやうになつたのは、この冬休みに入つて間もなくのことであつた。

それまでこんなことをしたことはなかつた。

ある日、男の子が二人寝てゐる部屋へ入つて行くなり、彼は、

「起床」

と叫んだのであつた。

それから、窓の戸を明けると、芋虫か何かのやうに、ベッドの上で動いてゐる二人に向つて、低いが一層気合のかかつた声で、

「舍前集合、五分後」

と云つた。

起床、はよいとして、次に彼が口にしたやうな号令は聞いたことがない。いまから二十年ほど前にまだ若かつた彼が海軍で訓練を受けてゐた時には、そんな号令は誰も云はなかつた。もしさういふ風な云ひ方をするなら、「舍前集合、五分前」と云ふべきである。そこでは何をするにも「五分前」が附くのであつた。

だが、彼の口から出たのは、

「五分後」

であつた。さうして、云つてみると「五分後」といふのも悪くはないやうな気がした。何だかゆとりがあつて、ひびきもやはらかだつた。

すると、不思議なことが起つた。二度目の号令を聞くと、明夫が眠さうな顔をこちらに向けて、

「え？ 何て云つたの」

と聞いた。

「舎前集合、五分後」

一回目にくらべると、今度の号令はいくらか小さい声になつた。それにも拘らず、明夫はすぐにベッドから飛び降りると、パジャマの上着を脱ぎながら、部屋の反対側の壁にくつついて寝てゐる弟に、

「早く早く、良二」

と声をかけた。

だが、下の男の子は布団の中に頭を隠してしまつて、聞えないふりをしてゐる。

「五分後だよ、良二」

彼は次に中学三年生の和子の部屋の前で、起きうかどうかとちよつとためらつてから、そのまま通り過ぎた。二人の男の子は九時すぎには寝たが、この子は夜中の二時すぎまで勉強をしてゐた。

彼がゆつくり間を置いて、玄関で靴を履いてゐると、廊下を走つて来る音が聞え、勝手

口の戸が明いて、誰かが外へ飛び出した。すると、殆ど音を立てないで、もう一人、あとから外へ出た。

扉を明けると、眼の前にもう明夫が「気を付け」の姿勢をして立つて居り、そこへジャンパーのチャックをかけないで、運動靴の爪先をかばりばんこに地面で蹴りながら、良二が駆けて来た。二人が並んだ。

「足の踵をくつつけて」

「良二、口をあげるんぢやない」

同じ色のジャンパーに同じデニムのズボンを穿いてゐる二人が、彼に敬礼を返した。

「指の間がひらいてゐる」

「親指が離れてゐる」

口だけ閉ぢてゐるが、良二の顔は笑つてゐる。さあ、文句を教へてやらなくてはならない。

「集合、終わりました」

すると、明夫は敬礼したままで、

「集合、終りました」

「よし。マムシの道に向つて出発！」

で、彼は先頭を切つて駆け出したが、続いて来る筈の足音がすぐに聞えなくなつた。振り向くと、明夫と良二は道ばたの熊笹の茂みに向つて、小便を飛ばしてゐるのだつた。

「仕様がないな。軍律も何もあつたもんぢやない」

彼はさう呟いて、手持ち無沙汰に立つてゐたが、二人は何か夢でも見てゐるやうな顔をして、向うの谷間を眺めてゐた。さうして、二人の小使はなかなか終りにならなかつた。

かうして、朝の日課が始まつた。ひよいと口から出た号令が、二人の男の子にこんな興味をひき起さうとは、彼も考へてゐなかつた。

よく二人は日曜日の朝など、自分たちだけでこつそり起き出して、服を着換へて、足音を忍ばせて外へ出て行くことがある。だが、休みになると、そんなこともしなくなる。寒い時は殊にさうだ。

布団を剥がすと、毛布にしがみつく。毛布を取つてしまふと、今度はシートにしがみつ

く。シーツを取つてしまふと、枕にしがみつく。見られた恰好ではない。

せつかく一人の方を裸にしてしまつても、もう一人にかかつてゐる間に素早く自分のシーツや毛布を拾ひ集めて、身体に巻きつける。

そんな二人が、

「舍前集合、五分後」

といふ、かけた本人が口にしたこともないやうな変な号令で、思ひがけない反応を起したので、彼もびつくりした。さうして、たつた二人ではあるが、ちゃんと眼の前に並んで彼の次の号令を待つ姿を見ると、「集合」といふ感じがして来るのだつた。

もつとも、これらのことは全く下地がなかつたわけではない。冬休みになるまでに、何かの拍子で彼は上の男の子に敬礼の仕方を教へたことがあつた。「氣を付け」と「休め」も教へた。

「さうさう」

腕の恰好や指の揃へ方を直してやりながら彼は云つた。

「さうやつて氣を付けをすると、別人のやうだ」

「ベツジンつて？」

「間違へるやうだ、といふことだ。きりつと引きしまつて、すっかり賢さうな子に見える」

「本当にさうですね。えらいものですね」

とそばで細君が相槌を打った。

明夫は、「休め」がやり難さうであつた。学校で「休め」といふ時は、両手を腰のうしろに廻して足をちよつと開くのだと云つて、やつて見せた。

「外国の軍隊みたいにやるんだな」

そのやり方に明夫はもう馴れてしまつてゐた。「休め」と云ふと、ひとりでにすつと足が開いてしまふ。手がうしろへ行く。

彼が教へた日本式の「休め」をやると、何だか傾きさうな恰好になる。右足はそのまま、左足だけ斜め前に同じ角度で出すといふのがやり難い。

「氣を付け」も敬礼もうまく出来るやうになつたが、「休め」だけは何度やつてもうまく行かない。ついでに彼は「右向け右」、「左向け左」、「廻れ右」をやらせてみたが、これは

学校でも習つてゐるらしく、すぐにやれた。

彼は掘り炬燵の中に坐つたままで、次々と号令をかけて明夫を動かさせた。明夫は敬礼や「氣を付け」の時は真面目な顔でやり、「右向け」、「左向け」になると度々反対の方に向いて、笑ひ出した。本気で間違へるのか、知つてゐて間違へるのか分らないやうなやり方である。

「笑つてはいけない」

と彼は云つた。

「どちらが右で、どちらが左か、知つてゐるだらう。それに間違へて笑つたりしてはいけない。右の手はどつちだ」

「えーと、どつちだつたかな」

「御飯を食べる時、お箸を持つ方の手はどつちだ」

「えーと、お箸はどつちの手で持つんだつたかな」

「明夫」

と彼は云つた。